

「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部2年 小川 絢加

①

(学習成果・経験) : 私自身昨年の夏に初の海外経験を大学を通じて行いました。2か国訪れましたが1つは教員を介しての団体行動、もう一つは英語圏での活動だったこともあり、自ら積極的に話していくことや、他の国の学生と交流する語学を中心とした活動は初めてでした。派遣前は、正直なところ中国に対して100%ポジティブなイメージは持っていませんでした。治安や衛生、国の仕組みやルールなど、日本で事前に得ていた情報や家族や教授、友人など身近な人たちから様々な心配の声もかけられました。しかし、派遣後2週間を振り返ると、「百聞は一見に如かず」という言葉が本当にその通りだという事を実感しました。授業では、コミュニケーションがうまくいかずにいた私に担当教員はゆっくり発音をしてくださったり、同級生は「この中国語は英語で〇〇という意味だよ」と教えてくれ、授業の内容の解釈の答え合わせに付き合ってくれたりしました。また授業以外で印象的だったことに、スーパーや商店の方とのコミュニケーションも思い出として残っています。「どこから来たの」という会話から、この果物は〇〇という発音、味はこんな感じと様々な中国語の表現を教えてください、お金の仕組み(一角、一元、お金の読み方など)をわざわざ裏から小銭の箱を持ってきて見せてくださったりなど、私にしかできなかったかも?という経験もたくさんできました。これまで中国は日本との国交の関係をニュースなどで見聞きしたうえで、日本のことをよく思っていない、冷たい、などのイメージを持っていました。勿論そういう側面もあるかもしれませんが、それがすべてではないという事も感じる事ができました。語学面に関しては、第二外国語は中国語以外だったため、ある程度独学で学んだ状態ではありましたが、十分にコミュニケーションをとれるほどではありませんでした。現地の学生とは英語で話すことが多かったですが、互いが母語ではない英語を使う事で、解釈に齟齬が生まれたり、正しいコミュニケーションが取れなかったりという事が多発しました。「郷に入っては郷に従え」という言葉もありますが、中国ではたとえ英語が伝わるとしても、中国語でコミュニケーションをとれるようにしていく必要があると感じます。それは他の英語圏以外の国でも同じで、今後会議や留学や研修に行く際、つたないものであっても現地の言葉では喋ることのできるレベルにはしていく必要があると感じました。

②

プログラム内容 : 今回は平日の内午前または午後に授業があり、アクティビティがあるとき以外は自由だったこともあり、西湖を中心に大学外に赴きました。また他大学との交流も深め、彼らに誘われ早朝に寺院を探索したり、留学生も交えて食事やゲームを行ったりなどもできました。アクティビティでは紫金港キャンパスでのツアーや川沿いのライトアップ等なかなか訪れないであろうところにも赴くことができました。自分から話しかけることは苦手でしたが、現地学生に話しかけたことも印象深いです。

③

進路について : 私は現在、農学部で学んでいますが、その中でも「国際農村発展」の分野に興味を持っています。特に東南アジアを中心として、農業形態に着目したり、輸出入にも興味を持ったりしていますが、どちらの場合も中国は大きな力を日本だけでなく農業国のタイやフィリピンをはじめとした東南アジアにも持っています。今回の派遣を通して、直接的な農業を見ることはなかったもののアクティビティでの様々な街の景色や人々の姿、スーパー・八百屋・商店・デパートをはじめとした小売店の業態を見てみると、日本との違いや特徴的なものも多く目にすることができました。今後も、今の興味を追求していきたいと考えていますが、その中で、市場の流通の仕組み、経済の流れ等を肌で感じる事ができたことは、文献だけでは到底理解できない貴重な経験となりました。